OSAKA UNIVERSITY MINOH CAMPUS MASTER PLAN

大阪大学箕面キャンパスマスタープラン

大阪大学箕面校区校园总平面图	中国語
오사카대학교 미노캠퍼스 마스터 플랜	朝鮮語
ОСАКАГИЙН ИХ СУРГУУЛИЙН МИНОО ДАХЬ САЛБАРЫН ЕРӨНХИЙ ТӨЛӨВЛӨГӨӨ	モンゴル語
RENCANA INDUK KAMPUS MINOH UNIVERSITAS OSAKA	インドネシア語
Saligang-Plano ng Unibersidad ng Osaka, Mino Kampus	フィリピン語
หลักการ วิทยาเขตมิโน มหาวิทยาลัยโอซากา	タイ語
QUY HOẠCH TỔNG THỂ CƠ SỞ MINO ĐẠI HỌC OSAKA	ベトナム語
ဓိုဆာကာတက္ကသိုလ်မိနိုးနယ်ဧရိယာဒီဇိုင်းကိုဗဟိုပြု	ビルマ語
ओसाका विश्वविद्यालय मिनो परिसर मास्टर प्लान	ヒンディー語
جامعه اوساکا کے مینو کیمپس کا ماسٹر پلان	ウルドゥー語
الرسم التخطيطي لحرم جامعة أوساكا في مينو	アラビア語
برنامهٔ جامع محوطهٔ مینوی دانشگاه اوساکا	ペルシア語
OSAKA Üniversitesi'nin Minoh Kampusu'ndaki Ana Planı	トルコ語
Mpango Mkuu wa Kampasi ya Minoh, Chuo Kikuu cha Osaka	スワヒリ語
Генеральный План Кампуса Миноо Университета Осака	ロシア語
Ószakai Egyetem Minoo kampuszának a fejlesztési terve	ハンガリー語
OSAKA UNIVERSITET MINOO CAMPUS MASTERPLAN	デンマーク語
OSAKA UNIVERSITET MINOO CAMPUS MASTERPLAN	スウェーデン語
GRUNDPLANUNG MINOH CAMPUS UNIVERSITÄT OSAKA	ドイツ語
OSAKA UNIVERSITY MINOH CAMPUS MASTER PLAN	英語
PLAN DIRECTEUR DU CAMPUS DE MINOH DE L'UNIVERSITÉ D'OSAKA	フランス語
Master Plan di campus dell'Università di Osaka	イタリア語
Plan Master de Campus de Minoo de la Universidad de Osaka	スペイン語
PLANO PILOTO DE CAMPUS DE MINOH DA UNIVERSIDADE DE OSAKA	ポルトガル語
大阪大学箕面キャンパスマスタープラン	日本語

2009.3.

箕面キャンパスマスタープラン目次

◆ はじめに　～ 2008年度版の位置づけ ～　2

◆ １章　マスタープランとは
- 1-1.　マスタープランとは　3
- 1-2.　経緯および上位計画と全学キャンパスにおける位置づけ　4
- 1-3.　箕面キャンパスマスタープランのコンセプト　4
- 1-4.　マスタープランの達成手法　5
- 1-5.　マスタープランの作成手順　5

◆ ２章　現状の分析と課題
- 2-1.　アンケート・ヒアリング・ワークショップ意見総括　6～8
- 2-2.　今あるキャンパスの活かすべき個性　9
- 2-3.　具体的問題点のまとめ　10
- 2-4.　地域における箕面キャンパスの位置づけについて　11

◆ ３章　将来の全体空間骨格像
- 3-1.　将来の全体空間骨格像　12
  - ① 交流軸　② 交流広場
  - ③ キャンパスの顔　④ 憩いの広場
  - ⑤ 講義棟沿いの快適な移動動線　⑥ グランド
  - ⑦ キャンパス南北軸（新北門）　⑧ 造成地の有効活用（新東門）

◆ ４章　リーディングプロジェクト
- 4-1.　リーディングプロジェクトの設定と全体配置　13
  - ① 福利厚生棟周辺のバリアフリー化　14
  - ② 新北門の整備　15
  - ③ 北側12m道路周辺整備　15
  - ④ 新東門・東側造成地・課外活動施設付近の整備　16
  - ⑤ 研究講義棟東側通路のプロムナード化・グランドを囲むグリーンスケープ　17
  - ⑥ バス停周辺の整備　17
- 4-2.　各リーディングプロジェクトの優先順位の考え方　18

◆ ５章　デザインガイドライン
- 5-1.　建物のデザインガイドライン　19
  - 5-1-1.　2005年版（豊中・吹田が主対象）の考え方と箕面地区における考え方
  - 5-1-2.　眺望や山並みの風景の尊重
  - 5-1-3.　オープンスペースとの連続性周辺の中におけるアクセサビリティへの配慮
  - 5-1-4.　周辺住宅地への配慮
- 5-2.　オープンスペースのデザインガイドライン　20
  - 5-2-1.　2005年版（豊中・吹田が主対象）の考え方と箕面地区における考え方
  - 5-2-2.　地形に配慮したデザイン
  - 5-2-3.　眺望に配慮したデザイン
  - 5-2-4.　街路ごとの個性化
- 5-3.　緑のデザインガイドライン　21

◆ ６章　アクションプラン（ソフトウェア的手法）
- 6-1.　2005年版（豊中・吹田が主対象）で示されたメニュー　22
- 6-2.　箕面地区での経緯と実績　22
- 6-3.　箕面地区におけるアクションプランの提案　23

◆ ７章　今後の課題　24
- 7-1.　全学的長期方針の中での箕面キャンパスの位置づけとの整合
- 7-2.　教育カリキュラム等の諸課題との整合
- 7-3.　緑のフレームワークプランについて
- 7-4.　バリアフリー・サインのフレームワークプランについて

◆ はじめに　～　2008年度版の位置づけ　～

平成19年10月に大阪外国語大学は大阪大学と統合し、その校地は大阪大学箕面キャンパスとなった。箕面キャンパスは平成20年5月現在、敷地面積１４０，６００㎡、建物の延床面積６２，３２３㎡（建ぺい率12.0%、容積率44.0%）・学生教職員数約４，０００人を有し、大阪大学の３大キャンパスの一角を占めている。

［参考］

豊中キャンパス：敷地４３９，１５６㎡、建物延床面積２４２，２９６㎡（建ぺい15.3%、容積55.3%）、
学生教職員数約１２，０００人

吹田キャンパス：敷地９９６，６５９㎡、建物延床面積６０６，８７６㎡（建ぺい18.0%、容積60.9%）、
学生教職員数約１７，０００人

大阪大学は平成17年（2005年）にキャンパスマスタープランを策定しているが、この時点では豊中キャンパスと吹田キャンパスがその対象であった。箕面キャンパスでは旧外大時代に施設整備の中・長期計画が立てられているが、キャンパス全体の理想像を意識してつくられたものではなかった。キャンパスを魅力あるものにしてゆくためには、空間の全体像をイメージしたキャンパスマスタープランが是非とも必要である。また箕面キャンパスには地域との交流をはじめとする、長年にわたってつちかわれてきた豊かな文化があり、ぜひともこれを守り育ててゆく必要がある。

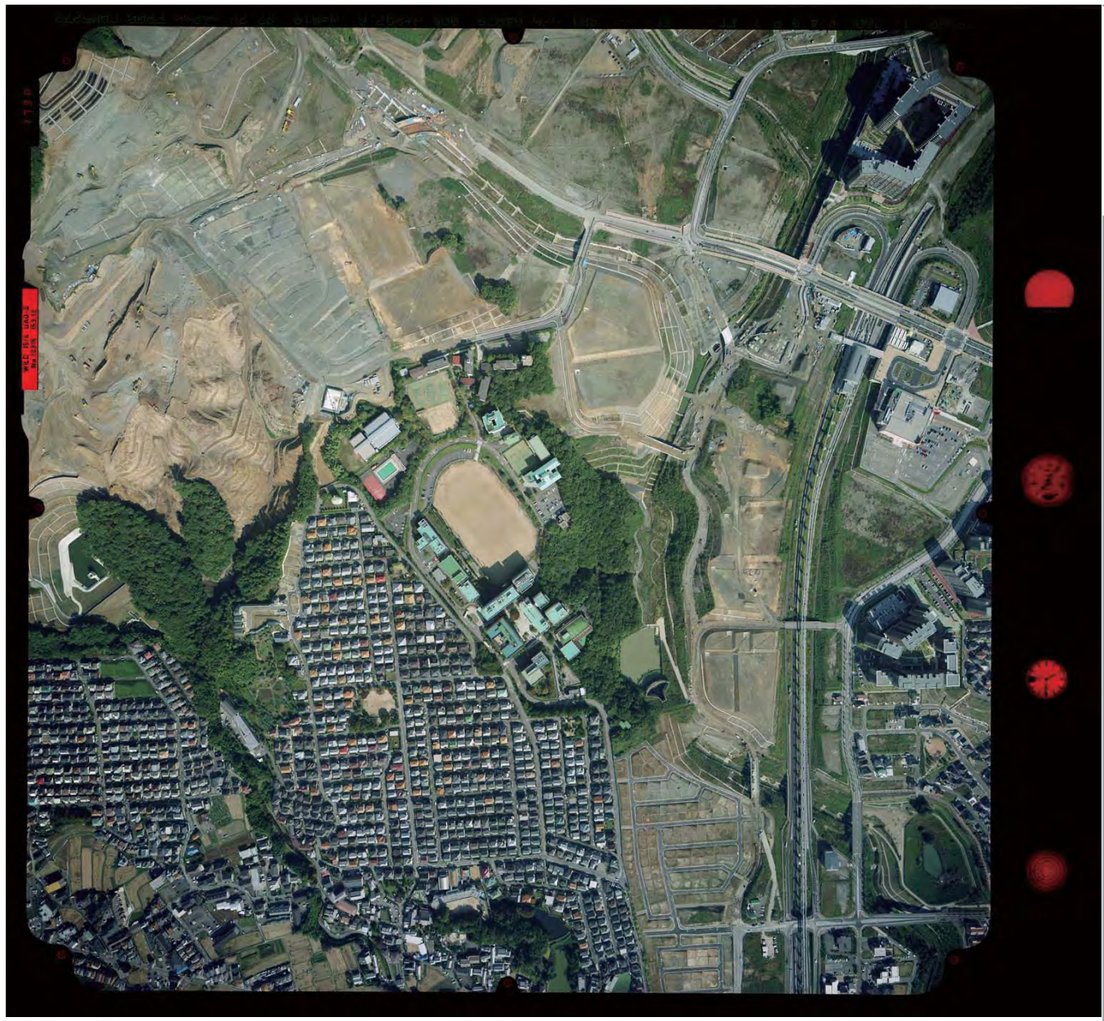
一方で、統合によって大阪大学全体として箕面キャンパスをどのように活かしていくか、ということが今、問われている。本来箕面キャンパスのマスタープラン策定には、その上位にあるべき、大学としての箕面キャンパスの活用方針の設定が望まれるところである。しかしこの上位方針の策定には相当の全学的検討や調整が必要であると考えられ、ハードウェアの方針たるマスタープランも、この上位方針をただ待っているわけにはいかない。

またキャンパスマスタープランにおいては、ソフトウェアとは切り離して、空間の豊かさや使いやすさや、あるいは安全性などの面から検討できる部分も多々ある。

そこで本マスタープラン（2008年度版）は、大学としての箕面キャンパスの活用方針については保留した暫定版として策定する。これら保留事項については「７章．今後の課題」としてまとめる。

上位方針の相当大きな変更（例えば大規模な部局移転など）が無い限りは、本マスタープランはほとんどの部分が有効に機能するはずである。また相当な変更があったとしても、空間骨格やデザインガイドラインの大部分は有効であると考えられる。

以上をもって2008年度版を位置づける。



平成20年8月撮影.

南東上空からの見下ろし

南南西上空からの見下ろし

◆ １－１．マスタープランとは

1-1-1.　キャンパスマスタープランの必要性

◇ 旧・外大キャンパスの魅力と課題

箕面キャンパスは、いたるところで大阪の市街地や山地側への眺望が開けるとともに、大阪外国語大学時代の様々な出来事や記憶の風景をキャンパスに刻み込んできた。山並みや街並みを背景とするシーンの連続こそ、このキャンパスが育んできた魅力であろう。

一方、豊かな自然環境に近接しながら、キャンパスに来てみると、意外に緑は少なく、擁壁が目に付く。また、南側校舎群と、北側の寮や体育施設のゾーンとの関係が分断されており、解決すべき課題も山積している。

◇ 箕面キャンパスマスタープランの役割

キャンパスを持続的に育てていくためには、以上の魅力や課題を深く理解し、大学と地域の人々の間に共有化していく必要がある。将来、たった１つの建物や環境整備が、積み重ねてきた歴史を台無しにしてしまうことがあり得るからである。

キャンパスにこれから継承していくもの、改善していくべきものを明確にし、後世に伝えていくために、２００５年度に「大阪大学キャンパスマスタープラン」が策定された。箕面キャンパスにも、この理念が受け継がれる。

「箕面キャンパスマスタープラン」の役割は、平成１７年度版の時点から熟成された理念を「加筆」・「再編集」するとともに、箕面キャンパスの魅力と個性を伸長させることである。

◇ 「フレームワークプラン」

このマスタープランには、「フレームワークプラン」のセンスをふんだんに取り入れる。フレームワークプランとは、米国の先進事例で見られる持続的なキャンパス計画のモデルであり、プラン自体のボリュームの大半はキャンパス環境の特性の読みとりに割かれる。一方、施設や環境整備に関しては、具体的な計画を規定するわけではなく、理念やデザインガイドラインのレベルに止めている。

例えば、永久に残す広場や水面を「定義」し、そこに面する建物については、周囲の環境の文脈を生かしながら建物の向きや低層部の開放性に配慮するといった主旨のデザインガイドラインを定めていく。つまり、具体的なデザインを規定しないため、何十年経ってもデザインの陳腐化の心配はなく、理解力とデザイン力に優れた担当者が集まれば、デザインガイドラインの下で全体としての調和を取りつつ、各時代の最善のデザインを採用することができる。

1-1-2.　大阪大学のマスタープランの考え方の特長

変わらない（変わりにくい）部分を明確にし、将来、建物が更新されても、キャンパスの個性が継承されるようなプランとする。また、理念が人から人へと伝えられながら、「進化」するしくみをつくっていく。そのために、以下の特長をもつ。

◇「環境資源」と「環境改善の可能性」の分析

・キャンパスの魅力や個性が生まれているしくみの理解 … 広場、建物、風景、生活、歴史。

・伸ばすべきところ、改善すべきところの理解。

◇「骨格」と「場所」の定義

・キャンパスのイメージの「骨格」… 印象に残るキャンパスの「核」「軸線」「つながり」。

・残すべき場所、建物を建てない場所、人の出会いが生まれる場所、通り景観をつくる場所などを定義する。

◇ デザインガイドライン

・オープンスペース、建物、看板、屋外家具などのデザインの「考え方」や「決め方」。
例えば、広場や通りに向ける建物の「顔」や「足下まわり」の開放性。

・施設や環境整備に関して具体的な計画を規定せず、考え方のレベルに止める。
（その都度、キャンパスの文脈を理解し、最善の人による最善の工夫）
… これが過去から将来につながるキャンパスの歴史をつくっていく。

◇「進化」・「熟成」するもの

・時代が進めばデザイン的な対応の仕方・考え方・技術も常に進化する。
… キャンパスにおいても大きな整備から小さな改善まで、様々な創意工夫を積み上げていくことでマスタープランに足りないものを加筆していく。

・市民や学生・教職員の「参加」により、策定時には気づかない大切なアイデアを得る。

◇ 理念と経験を伝えていく「よりどころ」

・デザインの感性を磨いてきた人・磨こうとする人、キャンパスの環境を考えてきた人・考えていく人が集まる場、その経験を継承していく「場」とする。

[参考]オックスフォード大学（都市形成型）
700年以上街に蓄積されてきた、デザインに対する人々の共通理解が「ガイドライン」となっている。
写真のように、モダンな建物は街区の内側に建てられるため、メインストリートの景観は継承されやすい。

[参考]イェール大学（キャンパス開発型）
フレームワークプランを基に、デザインに対する共通理解を蓄積し「ガイドライン」を熟成させていく。上図は「ランドスケープのフレームワーク」と、それにより守られる広場。

◆ １－２．経緯および上位計画と全学キャンパスにおける位置づけ

1-2-1. これまでのキャンパス計画指針に関する経緯と関連

Ａ．箕面キャンパスにおける新規策定

旧外大時における環境整備計画を再評価しつつ、箕面キャンパス・マスタープランに再編していくが、大筋の方針は2005年版マスタープラン（豊中・吹田が対象。以下、2005年版とよぶ）を継承し共通のものとする。

箕面キャンパスマスタープランでは各章・節の冒頭に、必要に応じて2005年版を参照・再掲しながら、箕面キャンパス独自のものとして必要な部分を中心に記述してゆく。

また2007年3月策定の「緑のフレームワークプラン」および2008年3月策定の「バリアフリー・サインのフレームワークプラン」に関する部分についても、本書において必要に応じて、引用しながら記述してゆく。

Ｂ．従来の阪大キャンパスマスタープランの熟成

2005年版マスタープラン（豊中・吹田が対象）は策定後３年以上が経過しており、その間に生まれた理念・考え方などを含めて再編集する機会でもあるので、これを意識した検討を行う。

1-2-2. 上位計画と全学における位置づけ

Ａ．**「大阪大学の新世紀（グラウンドプラン）」**（平成20年11月25日決定）との整合をはかる。

３つの使命につづく９箇条の「取り組みの大きな方向性」の中では下記２点が示されている。

６．旧大阪外国語大学との統合の成果を生かして　…　中略　…　国際感覚を備えた職員の養成をはじめとする学内の国際化、海外からの研究者・留学生の研究・修学・生活のための環境整備　…　後略

７．キャンパスを**〈多様性〉と〈持続可能性〉のモデル空間**として、また**卒業後も思い出に残る心地よい空間**として整備する。

また**「大阪大学活動方針2008」**（平成20年11月25日決定）においては６箇条の「取り組みの大きな方向性」の中の「６．持続性と活力を生む大学運営」8大項目の中で以下が示されている。

（６）地域との連携をめざすキャンパス整備

キャンパス整備本部を中心に、**全学的な視点から地域との連携や安全・環境に配慮したキャンパス整備**を実現し、**「キャンパスをタウンに」**というキャッチフレーズのもとで、世界トップクラスの大学にふさわしいキャンパスを構築する。

■長期的視野に立った全学的な施設マネジメント

□ キャンパスマスタープランにもとづいて豊中・吹田・箕面の計画的なキャンパス整備を実現する。とくに箕面キャンパスについては、早急にマスタープランを作成する。

…　中略　…

□ 国の補助金による耐震改修・リニューアルと学内経費を用いた劣化建物の機能回復や**プリメンテナンス**による長期供用を組み合わせたトータルマネジメントによるキャンパス整備を推進する。

…　中略　…

□ **学生参加型のキャンパスデザイン**を、**授業支援、学生活動支援**も含め多面的に推進する。これらの活動を通じて、**魅力あるコモンスペースの実現**をめざす。

□ 学内の**スペースマネジメント**を強化して、スペース利用効率の向上を図るとともに、**福利厚生施設の充実**を実現する。

□ **環境に配慮**するとともに、**省エネルギー**を実現するためのキャンパス整備を推進する。

■地域と大学が相互に浸透するコミュニティキャンパスの形成

□ **街づくりの支援**や地域医療の推進など、大阪大学の**教育研究を通じて地域の活性化**を図るとともに、**街としての文化性を備えた**居住空間への変貌を実現するための**「コミュニティキャンパスプラン」**を開発する。

□ **キャンパスエッジにおける整備**を推進し、**地域と大学が住環境像を共有するモデル**プロジェクトを展開する。

…　後略

Ｂ．「活発」な施設整備への対応

阪大は研究のアクティビティが活発であり、施設整備の動向を予想できない。したがって規模にかかわらず、全ての環境・施設整備を「マスタープラン」（特にそのデザインガイドライン）で導きながら、何十年かけてでも「骨格」と「場所」を守り育てていく必要がある。

◆ １－３．箕面キャンパスマスタープランのコンセプト

1-3-1. 全学共通のキャンパスマスタープランの目標・基本方針

2005年版で示された目標４項目および基本方針７項目は、箕面キャンパスにおいても全く同等に適用されるものである。以下にこれを抜粋する。

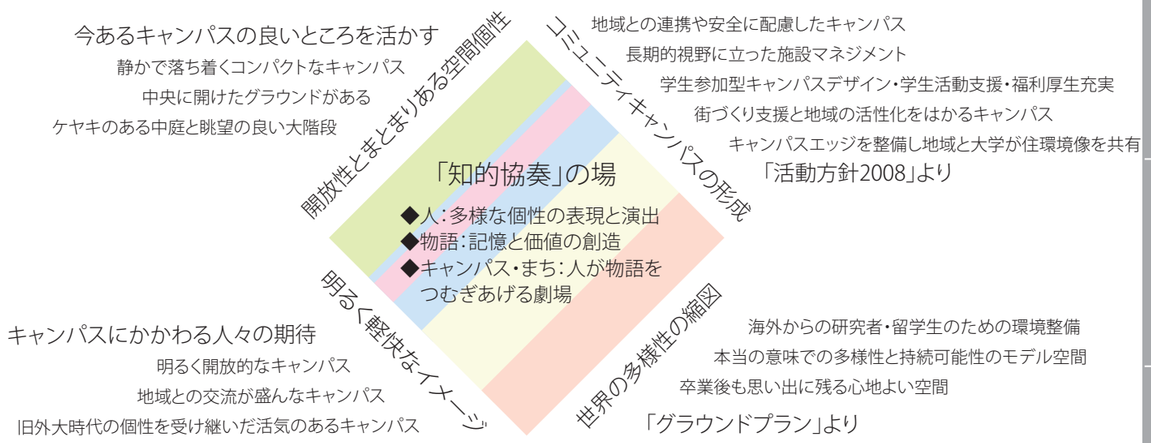
＜目標＞
- 誇りと愛着が持てるキャンパス
- 多様で豊かな交流が生まれるキャンパス
- 地域社会や世界に開かれたキャンパス
- キャンパス間、周辺関連施設との連携を持ったキャンパス

＜基本方針＞
- 資源・歴史を継承し育てる、個性ある環境づくり
- 将来にわたり教育・研究が実効的に展開できる環境づくり
- 学生・教職員が充実したキャンパスライフを展開できる環境作り
- アクセサビリティの高い交通と情報環境作り
- 地域に貢献できるキャンパスづくり
- 国際交流に貢献できる世界水準の教育・研究環境づくり
- 地球環境に配慮したキャンパスづくり

1-3-2. 箕面キャンパスにおけるマスタープランのコンセプト（2008年度暫定版）

「はじめに」で述べたように本来的にコンセプト策定には、大学としての箕面地区全体の活用方針が先行することが望ましい。

しかし、現在のキャンパスが持っているポテンシャルや個性と、ヒアリングやアンケートで得られたキャンパスに関わる人々の期待、及び「大阪大学の新世紀（グラウンドプラン）」を参照することにより仮のコンセプトを設定することは可能である。以下にコンセプトを示す。



コンセプト

◆ 1－4．マスタープランの達成手法

2005年版キャンパスマスター部分と同様の達成手法を基本とする。
これらを下記に再掲（一部改変）する。

大学に通う全ての人が魅力を感じ、また地域の人々に愛されるキャンパスをつくるために、基本的な考え方と方策をまとめる
共用施設、共用空間に関する整備方針を示す。→　キャンパスコモンの整備方針

内容・構成

1）ゾーンおよび骨格・核の構成
①一体として空間形成の方針を設定することが望ましいゾーンの構成
②キャンパスの顔を形成する軸となる空間 － メインストリート等
③キャンパスのイメージの核・シンボルとなる空間 － 広場、モニュメント等
④賑わいと交流の核となる空間
⑤副次的ストリートの良好な景観の形成

2）自然を生かしたアメニティの形成
… 緑地、街路樹、沿道緑化、法面緑地等の適切な造成と維持・管理

3）全ての人が安全に快適に移動できる環境の形成
… 歩行者、自転車、自動車の環境

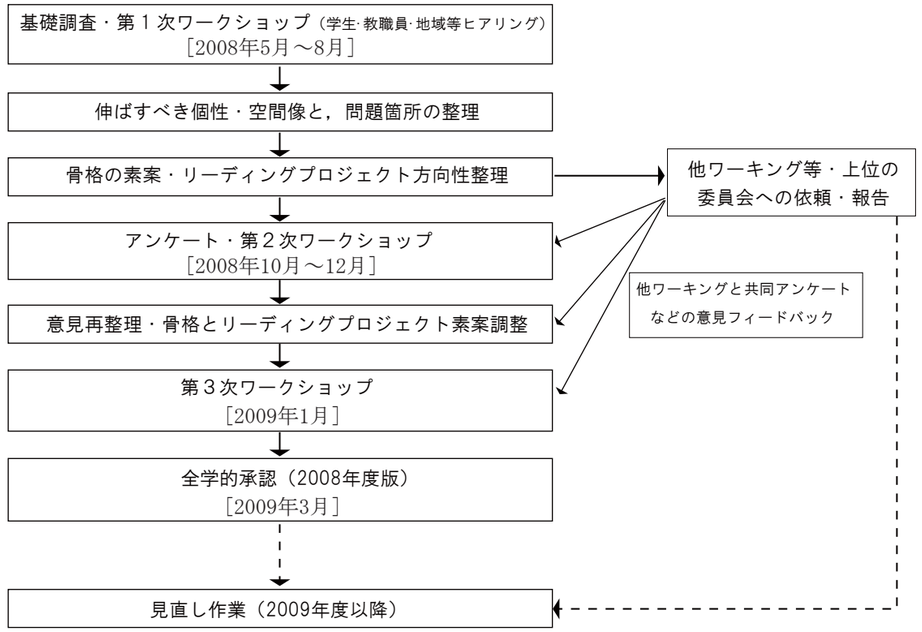
4）達成手法
① リーディングプロジェクト（早期に整備が望まれるプロジェクト）
重要なオープンスペース（広場）や門等の外部・共用空間は，優先度の高い計画対象として検討提案する

② デザインガイドライン（順次整備を進める際に守るべき環境整備の指針）

③ アクションプラン（美化活動などのソフトウェア的手法メニューの提案）

◆ 1－5．箕面キャンパスマスタープランの作成手順

箕面キャンパスマスタープランの作成手順は、以下のとおりである。



２章　現状の分析と課題

２－１．アンケート・ヒアリング・ワークショップの意見総括

◆ 2.1.1.　各調査の概要

キャンパスマスタープラン作成の参考にするために、下記の方法で各方面からの意見聴取を行った。

１．ヒアリング（学生・教職員・間谷地区住民・彩都地区住民［2008年5月～8月］）
　…　アンケート等詳細調査、各部整備案、コンセプトなどの方向性を得る
２．アンケート調査（学内向け・地域住民の方々向け［2008年10月～12月］）
　…　全体意見の趨勢を測り客観性をより高める、意外な意見を発掘する
３．合同ワークショップ［2009年1月］
　…　調査結果とある程度具体的な案を示した上で、素案の妥当性を検証する

◆ 2.1.2.　ヒアリング調査のまとめ

全部で84項目に整理できる意見を得たが、この結果統合に起因する事項や地域連携に関する事項など、マスタープラン作成作業の枠を超える問題や課題が明らかとなった。

これらについては「７章　今後の課題」の中で整理しておく。

なおこれら意見の詳細については、下記のアンケート調査で得られた意見に包含されているためここでは割愛する。

◆ 2.1.3.　アンケート調査の概要

平成20年10月から11月（一部は12月14日まで）にかけてアンケート調査を行った。

調査は2004年に行ったもの（2005年マスタープランに反映）とほぼ同様の形式をとったが、異なる点は、①地域住民向けアンケートを学生教職員向けのものとに分けた、②交通に関する設問を設けた、③2004年は着払い郵便ハガキで回収したが、今回はボックス回収、および間谷町自治会・コミュニティ彩都の協力を得たという３点である。

これはヒアリングにより、地域との連携がこのキャンパスの一つの特長であったこと、および交通問題が学生教職員に大きな関心を集めていることが垣間見えたことによる。以下に回答の概要を示す。

設問１～４．回答者属性について

上記①～③による属性の変化を除けば大きな特長はない。

教職員を中心に、主たる**活動エリアが豊中と箕面にまたがっているとの回答が7%**あった。ほとんどの教員が言語文化研究科や文学研究科などに籍をおくためとみられる。

また**箕面地区に拠点をおく教職員の割合が低いにも関わらず、今回アンケートでは12%の回収を得、教職員の関心が相対的に高いことが伺える。**

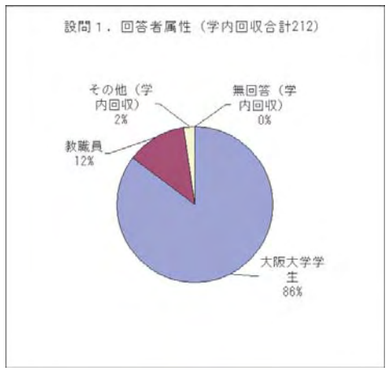
地域住民については、間谷地区は全て間谷東、彩都地区はほとんどが彩都あさぎ地区の回答である。

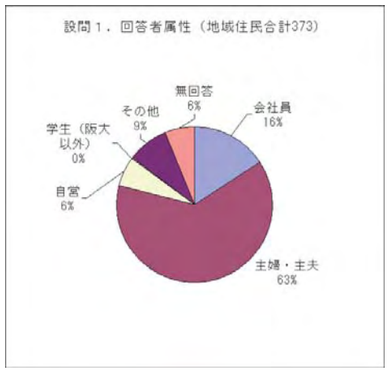
間谷東地区はキャンパス直近であり長年、祭などの様々な活動でお世話になったり、学生のマナーやバイク、自転車の問題でご迷惑をおかけしてきた経緯があり、キャンパスへの関心が高く、**間谷ではこれを反映した極めて高い回収率（間谷世帯数約700に対し44%**。ちなみに彩都は世帯数約3000に対して2%）を記録した。

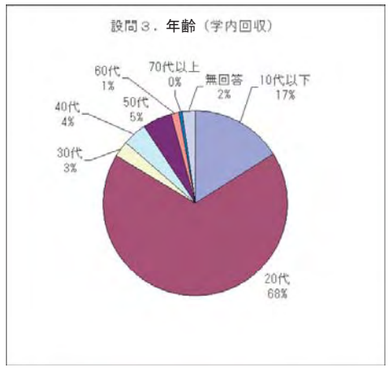
性別は、学内回答者では男女比＝1:2で、在籍者の比よりやや男性が多い。

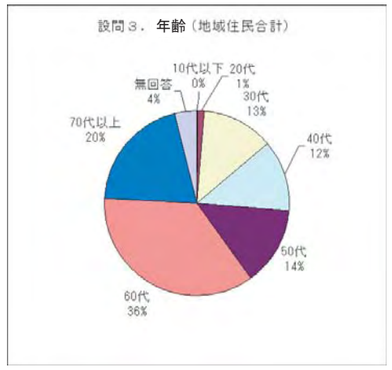
地域住民の回答者でも男女比はほぼ1:2となった。

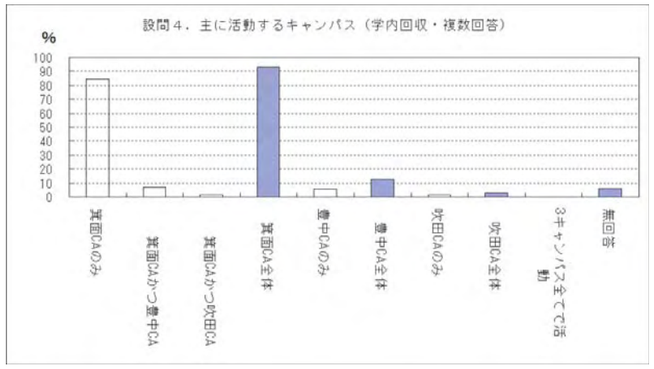
回答者平均年齢（例えば20代は25歳として計算）はそれぞれ学内26才・間谷58才・彩都60才であった。彩都はシニアクラブの協力による回答が多いため間谷よりやや高齢で分散が小さい。

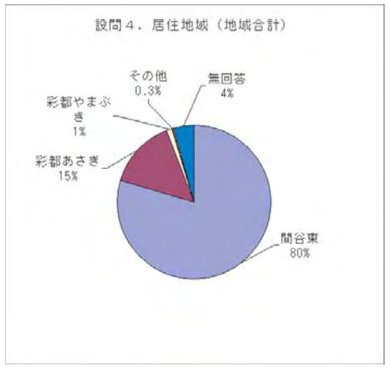












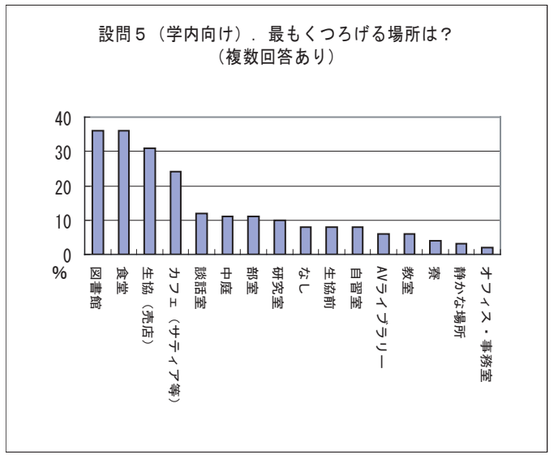
学内向け設問５．箕面キャンパスであなたが最もくつろげる場所はどこですか。

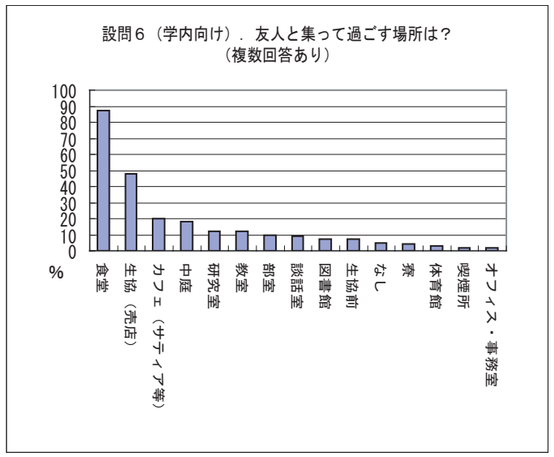
2004年調査（豊中・吹田）では職場（研究室等）＞食堂＞広場や部室、体育館等、という順だった。今回調査では、食堂・図書館＞生協等、という順序になっており、**豊中や吹田に比べると職場（研究室等）や部室に閉じこもる傾向がやや少なく、食堂・図書館等共用スペースの人気が比較的高い**ことがわかる。なお以降の設問においても、回答傾向には回答者属性との見るべき明確な相関関係はなかった。

学内向け設問６．箕面キャンパスであなたが友人や同僚と集まって過ごす場所はどこですか。

前問同様の傾向が見られ、職場（研究室等）や部室などに閉じこもる傾向が少なく、食堂やカフェ（サティア）と中庭の人気が非常に高い。豊中・吹田ほど食堂等の箇所数が無いことも、かえって人気が集中する要因とも見られる。

また、設問5・設問6ともに「生協前」という回答が少数であるがみられた（設問5:8票、設問6:7票）。両設問ともに、**生協や図書館などの屋内空間の回答が多い中、屋外空間として生協前が重要な交流の場となっていることがうかがえる**（参考：設問5：中庭11票、設問6：中庭18票）。

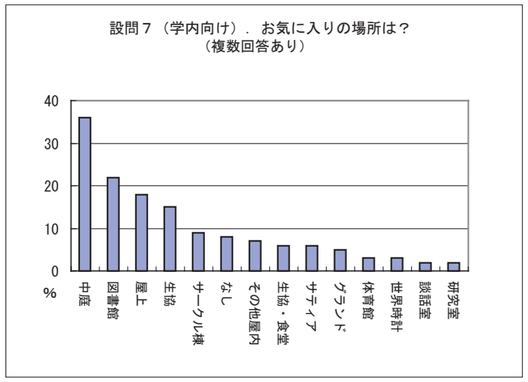




学内向け設問７．箕面キャンパスでのあなたのお気に入りの場所・風景はどこですか。

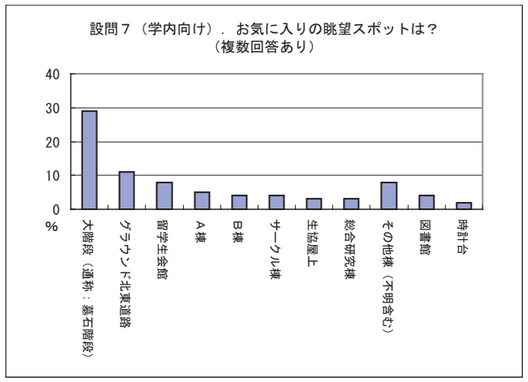
眺望系（昼間または夜景）の回答が34%と極めて高い。風景よりも各個別の場所が挙がった2004年（豊中・吹田）に比べて、眺望の回答が際立っていること、**および夜景を含む回答が18%と非常に顕著である。**

場所要素ではもちろん中庭・大階段（通称：墓石階段）が支配的であるが、それ以外の様々な場所からの眺望に関する記述があることも見逃せない。南側の大阪中心部方向への眺望だけでなく、山の稜線の記述があったことも興味深い。



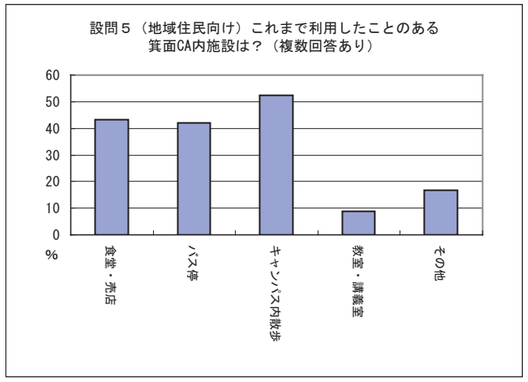
地域住民向け設問５．これまでに利用したことのある箕面キャンパス内の施設があればお教え下さい。
地域住民向け設問６．上記設問での利用頻度を教えてください。

バス停の48%、図書館の16%、ATMの14%、外大祭・間谷祭の12%が意外に多かった。また散歩道としてよく利用されている（58%）ことがわかる。ただし頻度は高くはなく、週１回以上は13%、月１回以上と併せても31%程度である。



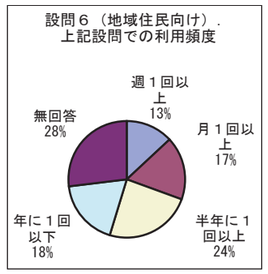
地域住民向け設問７．キャンパス内で行ってみたい場所はありますか（箕面キャンパス以外でも可）。

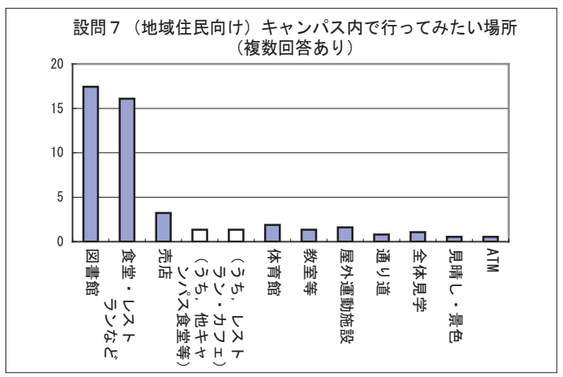
図書館、食堂（レストラン・カフェ）、売店、体育館・教室・グランド等という順だが、食堂類はその呼称に「レストラン」・「カフェ」が多いことから**「おしゃれ」で「おいしい」グレードのやや高いものが求められている**ことがわかる。また食堂類やキャンパス見学において他キャンパス・理工系も見てみたいという意見がある。

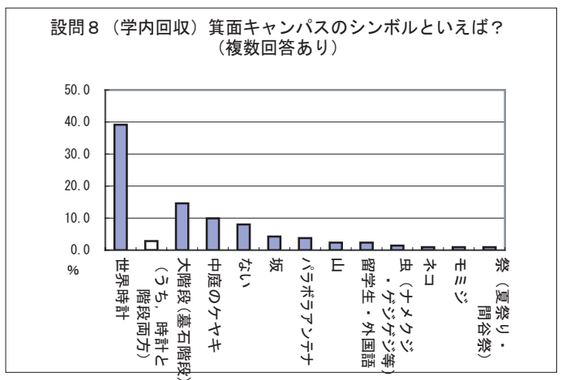


学内外共通設問８．箕面キャンパスのシンボルといえば何をイメージしますか。

学内向けでは**世界時計が圧倒的かつ中庭・大階段も多く、これらが一体的に、イメージの中心を形成している**ことがわかる。また中庭という回答のほとんどは、ケヤキ大樹と一体回答となっていた。







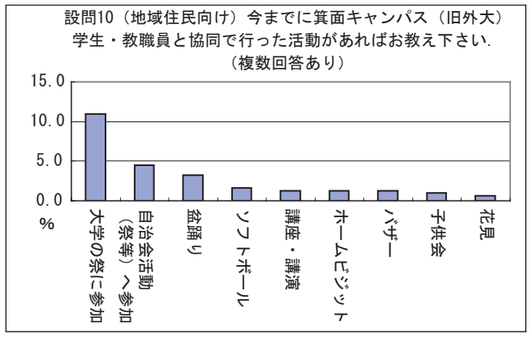
しかし「なし」と記入した積極的無回答も14票みられた(有効回答190票のうち)。

面白いのは「パラボラアンテナ」「留学生」「ネコ（てんてん）」。

地域住民向けでは、外国語、自然・緑、大階段（通称：墓石階段）の回答が多い。

地域住民向け設問10．今までに箕面キャンパス（旧外大）学生・教職員と協同でおこなった活動があればお教え下さい。

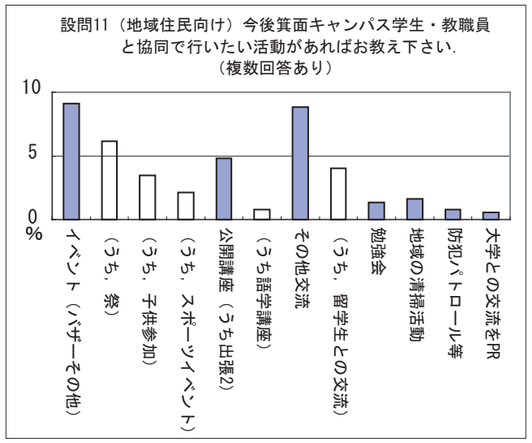
間谷地区の回答者の23%が何らかの活動を行っている。また内容も祭り・イベントからスポーツ・講演まで多岐にわたっている。彩都では開発からの日が浅いため有効回答は得られなかった。



地域住民向け設問11．今後，箕面キャンパス学生・教職員と協同で行いたい活動があれば具体的にお教え下さい。

イベントや交流は、祭り、子供参加、スポーツ、留学生交流に分類できる。

ほかに公開講座や勉強会も要望が強いが、これらは設問10.の実績では回答が少なかったものであり、今後の方向性として重要なものであることがわかる。**地域の清掃活動、防犯パトロールがあったことも興味深い。**これらはアクションプランのなかで重要な要素となり得る。



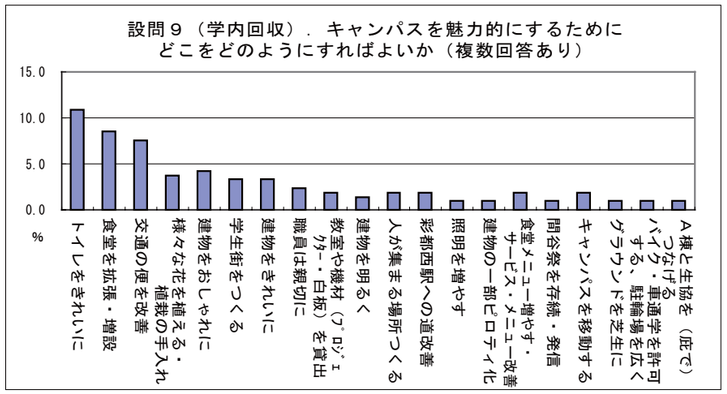
学内外共通設問９．「箕面キャンパスを魅力的にするためのアイデアをお寄せください」

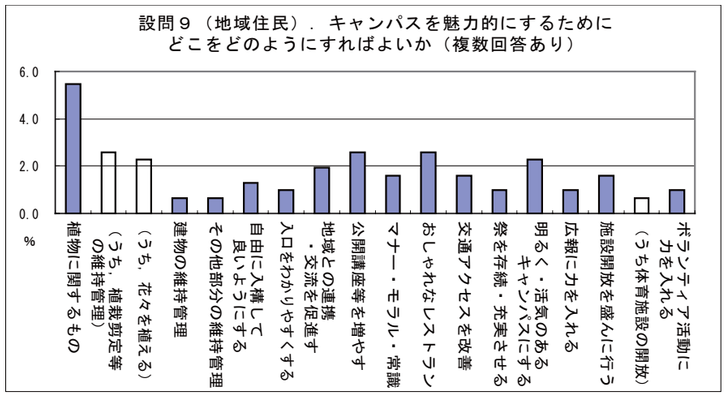
「トイレをきれいに」に代表されるように**維持管理に関するもの、および制度・運営・ソフトウェアに関するものが非常に多いが、建物のデザインや空間そのものへの言及は少なかった。**

ハード面へ特化した回答は、「食堂を拡張・増設」「花を植える」「建物をおしゃれに」が見られる程度である。

しかし本設問では次節で述べるように、少数回答のなかにマスタープラン作成への示唆に富む意見がいくつか得られた。

一方、地域住民の回答では、樹木剪定や建物の維持管理、出入りしやすい雰囲気、公開講座や交流への期待が高い。





学内向け設問10. ＝ 地域住民向け設問12.
「箕面キャンパスについて日頃感じていることについて具体的に書いてください」

交通が不便、トイレが汚い、閑散とした雰囲気、生活の不便、と続くが、ポジティブな回答（主に「静か」「落ち着く」）も多いことが特徴的である。これらは全体イメージコンセプトへの援用が可能と思われる。

その他おおまかには「キャンパスへの立入・防犯」「学生活動の支援」「箕面キャンパスのアイデンティティ」といった分類も可能であり、これらもアクションプランへの援用が可能である。

地域住民の回答では「マナーが悪い（交通・深夜の大声）」が多数を占めているが、こちらもポジティブな回答（以前より改善された、学生がまじめなど）もある。改善の努力が実っている面があると思われるが、なお一層の工夫が必要ということであろう。
（ヒアリングにおいても「クレーム中心のつきあいから交流・共生へ」という意見があった）

その他、施設開放への期待などが寄せられてる。

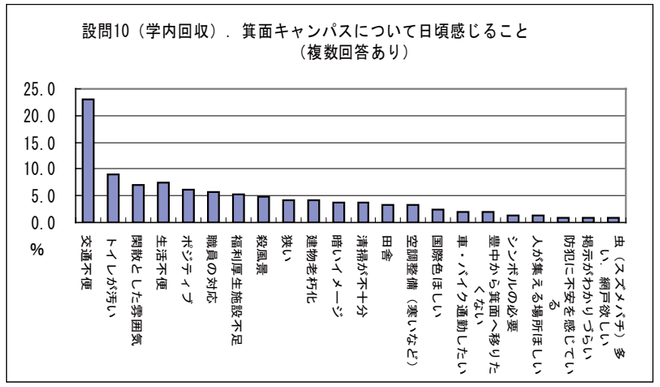
学内向け設問11. ＝ 地域住民向け設問13.
「これからの大阪大学に期待することがあればお書きください」

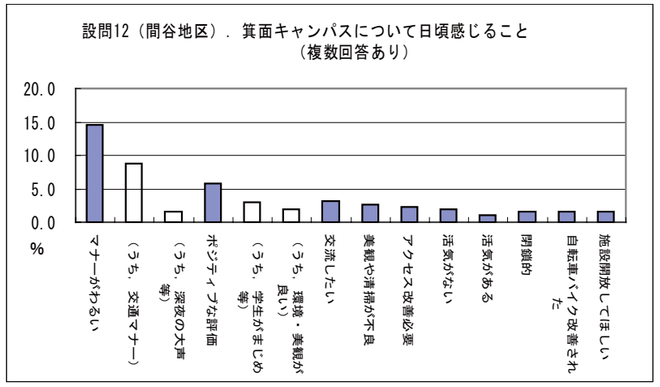
学内回収分は、大まかに下記の8グループに分けることができる。ほぼ前述のヒアリングで述べられた意見と重複しており、７章にまとめた課題にて整理している内容である。

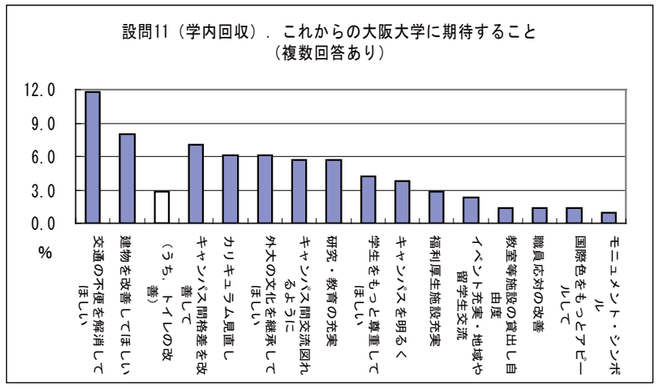
A．旧外大文化や統合に関するもの
B．研究・教育
C．建物イメージ・キャンパス骨格
D．生活の利便性向上など
E．学部間の交流など
F．学生生活支援など
G．その他
H．キャンパス間格差の改善

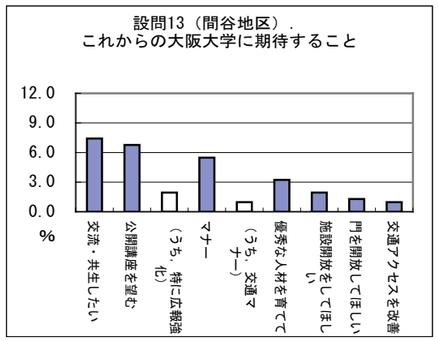
地域住民の回答としては、交流・共生への期待、マナー向上、公開講座・施設開放などが上げられている。また世界レベルの研究や優秀な人材の育成なども述べられている。

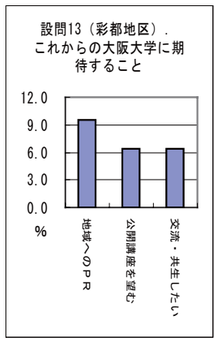
彩都では彩都の活性化につながる貢献・交流が期待されている。











◆ 2.1.4. 意見聴取のまとめとマスタープランへの援用

A．キャンパスのアイデンティティ・個性・シンボル

アンケートの学内向け設問５～８において、キャンパスのイメージに関しては、**中庭・大階段（通称：墓石階段）に関するものが支配的であった。この部分がキャンパス内において極めて重要なイメージ要素**として機能していることが、改めて確認できた。

また、**眺望、特に夜景に関する記述が非常に多く、これを活かした計画**が今後も必要であることがわかった。

B．現在のキャンパスのよいところ

特にアンケートの学内向け設問10.などにより「まとまりあるコンパクトなキャンパス」「地域との交流が盛ん」「眺望のよい地形」「緑が豊か」といった良いイメージがあることがわかった。

Ａとも合わせ、次頁にてこれらをまとめておく。

C．維持管理、特にプリメンテナンスの重要性

これはアンケートとヒアリング両方から得られ、2004年調査でも同様に得られた結論であるが、今回調査においても、維持管理に関する回答は大きなウエイトを占めており、改めて維持管理の重要性が確認できる。

D．マスタープラン実現手法へのヒント

特に学内外共通設問９において、重要な示唆に富む少数回答がいくつか見られた。下記に実現が必要または可能（比較的容易）かつ効果的と思われるものを列記する。

・A棟と福利棟を庇でつなげる。 → リーディングプロジェクトで参考にする
・B棟とグランドの間を整備する。 → 〃
・ピロティをつくる。 → 〃
・外灯を増やしてキャンパス内を明るくする。 → デザインガイドラインで参考にする
・自習室を増やす．。 → 〃
・中庭を許可制で飾り付けできるようにする。 → アクションプランで参考にする
・間谷祭を地域に発信する・旧外大祭存続。 → 〃
・植栽の整備･充実 → デザインガイドラインで参考にする

E．全体イメージコンセプトへのヒント

少数回答でも「暗い・殺風景・色味がない」に類する意見が見られるが、ポジティブな回答「静かで落ち着く」と組み合わせて考えると、「明るく、かつ静かで、活気がある」というイメージコンセプトを導き出すことが可能と考えられる。

コンパクトなキャンパス・眺望の良い地形・緑が豊かという条件とも非常に良く合うと思われる。これらは、１章のイメージコンセプトにて参考にする。

F．交通アクセス改善への手掛かり

今回アンケートでは下記項目についても回答を得ている。結果は割愛するが、「７章．今後の課題」で記述したとおり、交通の利便性改善の検討に用いるものとする。

（学内外共通）設問12. 新しいバスルートが出来たと仮定した場合、通学・通勤に利用しますか。
（学内外共通）設問13. モノレールの運賃が安くなると仮定した場合、通勤通学に利用しますか。
（学内向け） 設問14. あなたが現在箕面キャンパスに来るのに利用している交通機関は。
（学内向け） 設問15. その他通勤・通学に関して日頃感じていることについて。
（学内向け） 設問16. あなたの自宅最寄り駅を教えてください。
（地域住民向）設問16. あなたが自宅最寄りとして利用している交通機関はどれですか。

G．施設整備に関係の深い具体的な問題点も様々明らかとなった

これらについては、２－３にてまとめる。

2－2．　今あるキャンパスの活かすべき個性

本節では、アンケート調査やヒアリングなどで得られたキャンパスのポテンシャルのうち、眺望と緑の資源に関するものをまとめている。これらは主に５章 デザインガイドラインにおいて、特に守り育てるべき個性としてとりあつかう。

1．研究棟Ｂ棟屋上から中庭の先に望む眺望

1．同夕景

2．研究棟Ｂ棟屋上から運動場ごしに望む山並

3．大階段を見下した先にみえる市街地の灯り．

4．駐車場から雑木林ごしに望む眺望．

5．駐車場から運動場ごしに望む山並み．

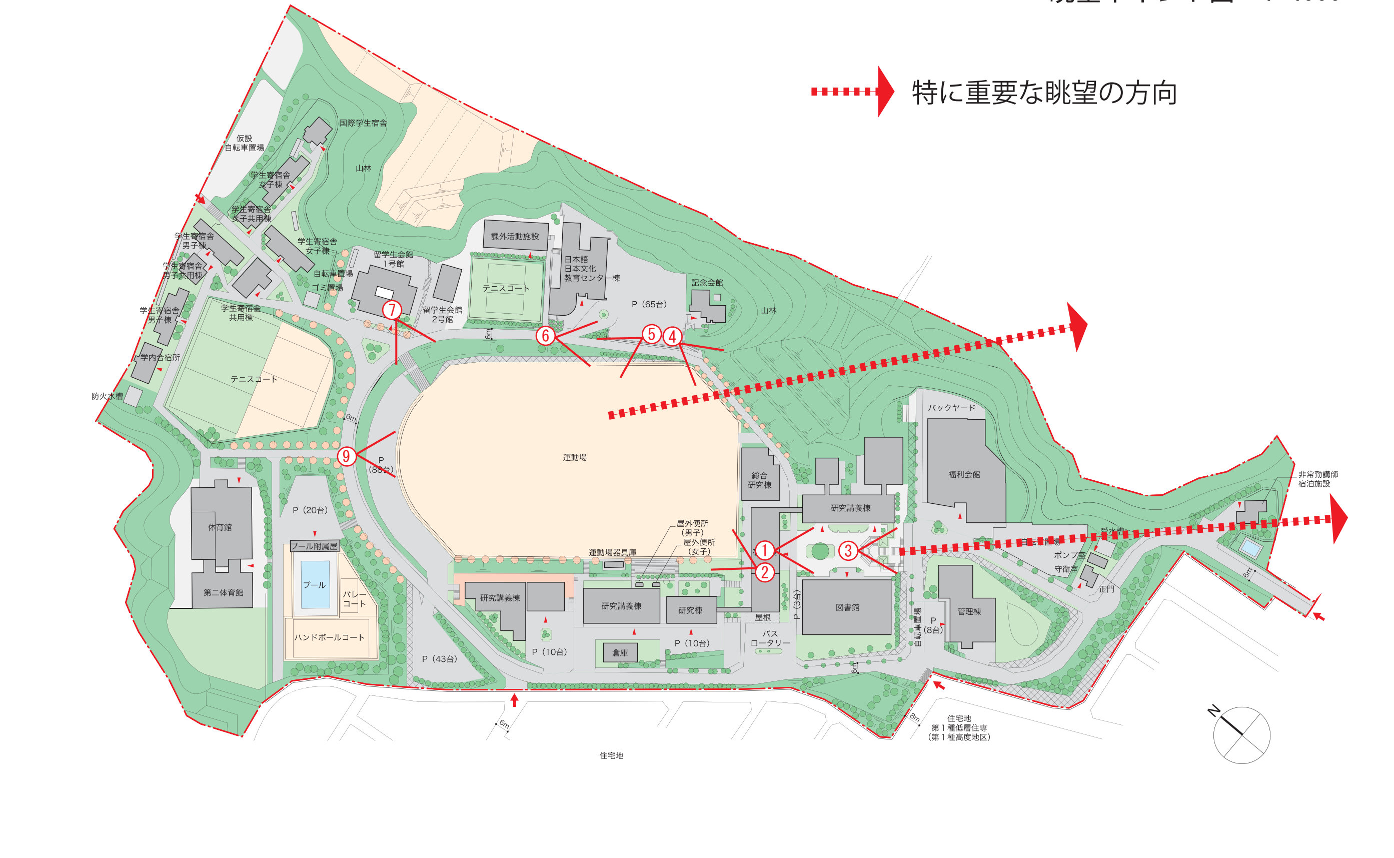
6．坂道を見下ろした雑木林ごしの眺望．

7．留学生会館１号館の屋上からみた千里方向

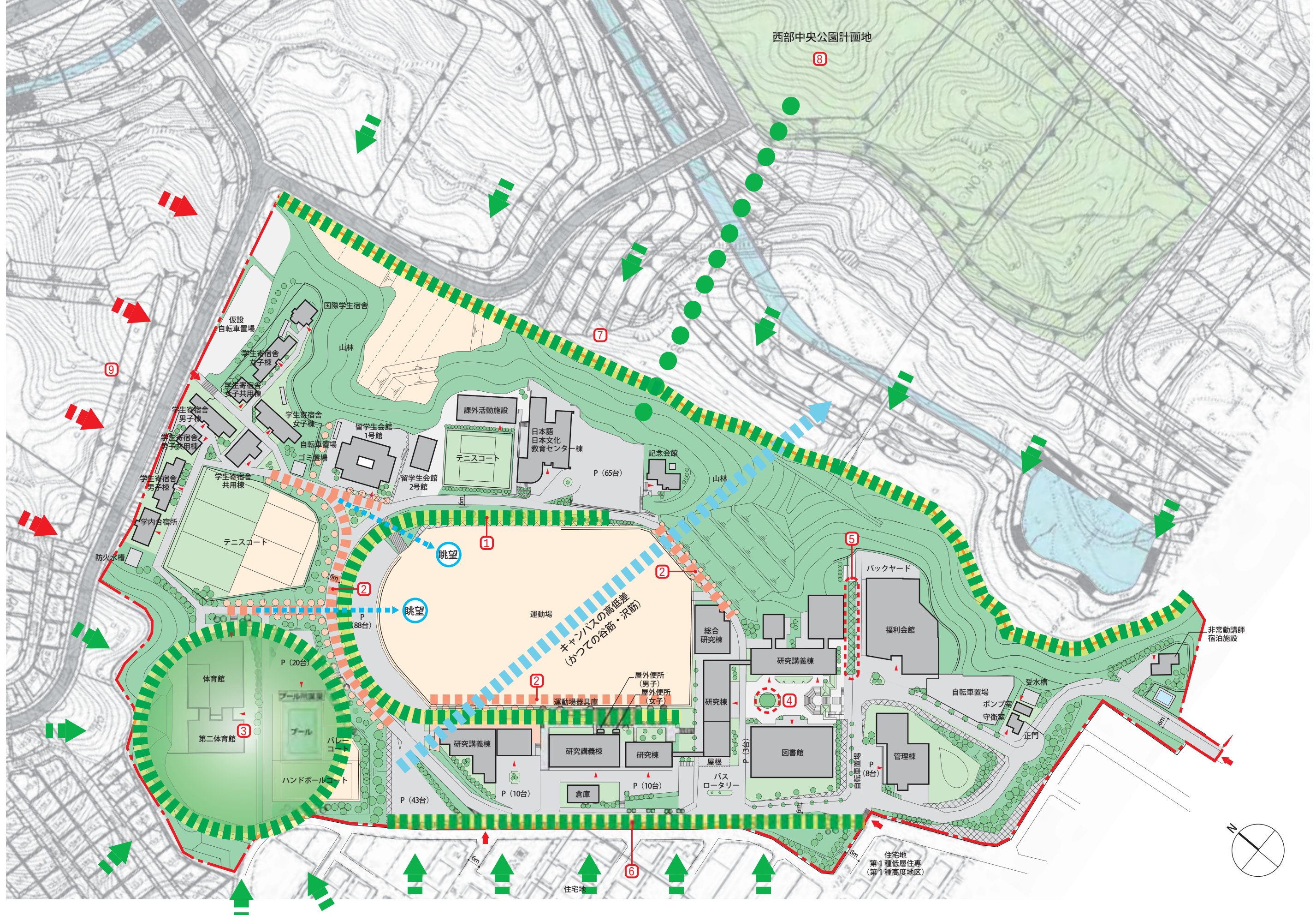
8．北門から彩都方向を見下ろした眺望

9．テニスコート西側道路から南に広がる眺望．

眺望ポイント図　1:4000



緑の資源図　1:4000



現状分析

２－３．　具体的問題点のまとめ

2.1.4で得られた意見のうち、施設整備・ハードウェアにかかわるものをまとめたのが右下図である。

１．日常の主要動線に急な大階段がある（通称、墓石階段）

２．車両入構口が南側の１ヶ所しかない
・災害時の車両入構、及びバス転回の問題

３．北門（現況）周辺の整備が中途半端
・バリアフリー上の問題がある
・大学の顔として貧相
・砂利敷きの暫定駐輪場はタイヤを取られ危険
・寮のプライバシー確保の上で問題がある

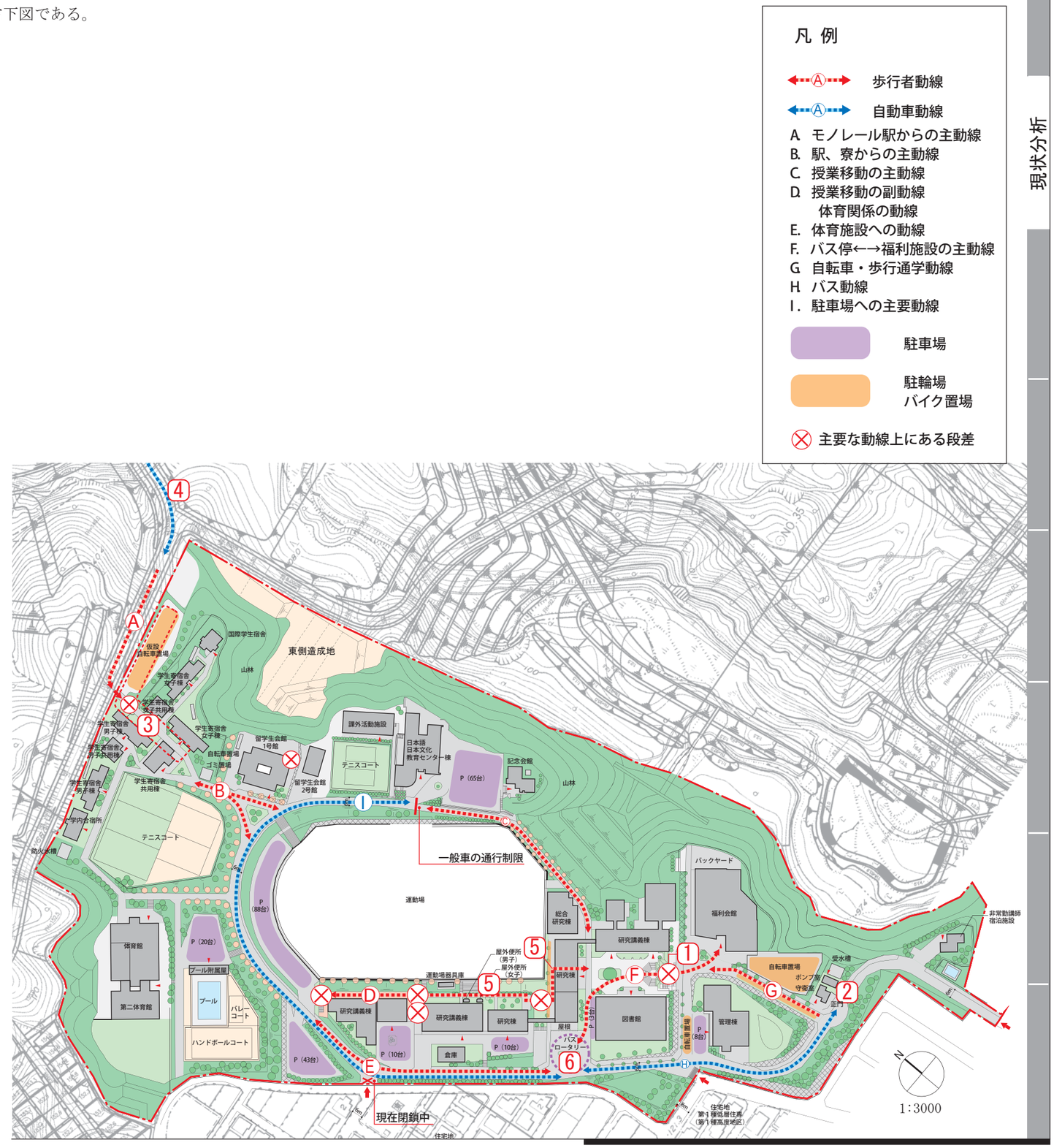
４．北門から彩都西駅への動線が遠回り
・彩都西駅や西部中央公園（整備予定）とのつながり悪い
・東側造成地の利用方針が不明確

５．日常の主要動線が裏道のような通路（Ｂ棟裏周辺）
・グランドの広がりを活かせていない

６．バス待ちスペースの不足
・混雑時は行列がテントからはみ出す
（雨天時に問題→テント拡張は早急に対処する必要あり）
・バスの待機スペースも不足している。

７．その他，キャンパス全体共通の問題
・魅力的な学生が集うオープンスペースが不足
・通学経路の多様化への対応が必要
・盗難などセキュリティ上の不安がある
・施設や屋外空間の維持管理が不十分

８．その他具体的ではあるが、個別に処理すべき問題点
・大階段（通称、墓石階段）が雨天時に滑りやすい
・南西門が、大学の顔としては貧弱である
・西門が閉鎖されている（門扉も劣化している）



現状分析

２－４．　地域の中における箕面キャンパスの位置づけについて

◆ひとつの「街」としての発展・成熟

間谷地区や周辺の旧集落には長年にわたり培われてきたコミュニティや文化がある。彩都は生まれたばかりの街であり、今後、学術研究機能や新しいコミュニティが発展してゆく。さらに、間谷地区との間には、旧大阪外国語大学時代から築かれてきた交流がある。

これらの資源を生かしながら、間谷地区、箕面キャンパス、彩都をひとつの「街」として結びつけることにより、過去から将来へと歴史を守り育て、共栄する魅力的な地域となる展望を開いていく。

◆地域の骨格の結節として

箕面キャンパスは、間谷と彩都を結びつける結節点に位置する。現在も北門と南西門を通じて両者を結びつけているが、キャンパス内の通路は歩行者系の街路としての整備が不十分であり、これに接続する彩都側の幹線道路の歩行環境も現状では未整備である。

東門ならびに新北門の整備と西門の開放が実現すれば、「キャンパスループ」が地域全体の歩行者系ネットワークの結節として重要な役割を担うことができる。

◆地域の歩行者系ネットワークの成熟に向けて

間谷地区には間谷西公園、彩都にはあさぎ里山公園があり、どちらも子どもや家族連れ、散策の人々によりよく利用されている。しかし子ども達の環境としても、散策ルートとしても単一的で選択肢が少ない面もある。

箕面キャンパスを新たな「公園」と位置づけ、歩行者系街路で結んでいくことができれば、間谷西公園、あさぎ里山公園、彩都西駅と東門の間に整備予定の西部中央公園の３つの公園と、さらに箕面キャンパスとを核とした広域的なネットワークへと拡げていくことができる。また、周辺には、旧集落、神社、里山、棚田などの文化的資源・自然資源も息づいており、様々な散策ルートが生まれる可能性がある。

◆箕面キャンパスの景観上の位置づけ

箕面キャンパスの校舎群は丘の上に位置するため、常に周辺地域の景観の「骨格」をつくりあげてきた。校舎や緑地のデザインの検討には、大きな社会的責任を伴う。

周辺地域の景観の中でのメモラビリティ（良い印象が残りやすいこと）に対する配慮も必要である。

粟生間谷から畑越しに

街路のアイストップとして

彩都西駅から

◆住宅地拡張への対応

公共施設の拡充が追いつかず拡がる住宅地。箕面キャンパスを街の核として位置づけることにより、公共スペースの充実に貢献することができる。

◆キャンパスと地域の接点の改善

閉鎖されたままの西門：門の開放と同時に、向かいの児童公園との一体的な整備の可能性も検討できる。

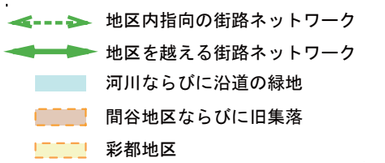
◆間谷地区に育まれた「環境資源」の尊重

間谷地区はかつての新興住宅地であるが、地域コミュニティの中で、維持管理への協力を通して、街路や緑などの環境資源が大切に育てられてきている。

間谷西公園の美しい木立

生垣による街路の個性化

市民に育てられる花壇



◆既存のネットワークとの連結

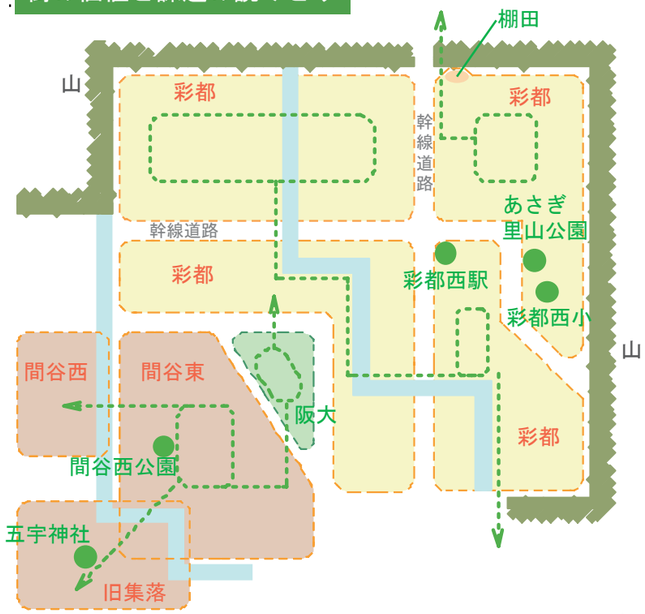
集落の細い通路

橋は水路の景観との接点

五宇神社

２本の樹木が集落のゲート

街の価値と課題の読みとり



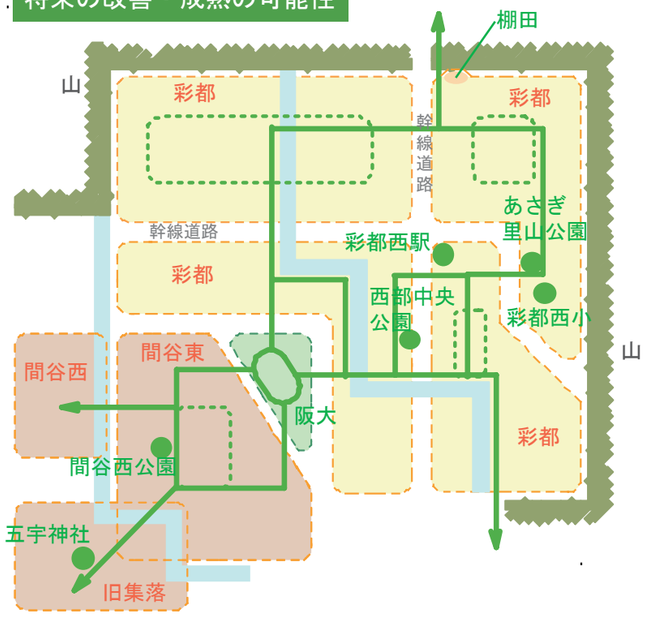
◆街が変化しながらも、旧集落に継承される記憶

昔の小屋組が残る屋敷

門が付け替えられた屋敷

いまも堰板の残る水路

将来の改善・成熟の可能性



◆山間部に蓄積される記憶

棚田は周辺のコミュニティと新しい住民と結びつけるフィールドとして期待される。

◆彩都に生まれつつある環境資源

子どもやグループでにぎわうあさぎ里山公園

◆新しい街の課題

幹線道路と法面により地区どうしのつながりが断絶されている

◆歩行者ネットワークの成熟の可能性

住宅と街路の関係性の改善

学校と公園の連結の可能性

幹線道路では、横断の多い部分の改良が必要。